

協力校としての取組

阿賀野市立安野小学校

【はじめに】

本レポートは、学習指導改善調査事業協力校の委嘱を受け、今年度の校内研修の取組を核に、学習指導改善調査の結果から見える成果・課題も踏まえながら全校体制で取り組んできたことを紹介するものである。よって、研究主題における「めざす子どもの姿」や「めざす授業の方向性」を全職員で共通理解して取り組んできたことをベースに、学習指導改善調査結果も含む児童の実態を改善すべく取り組んできた一連の活動である。

1. 研究主題

「分かった」「できた」と実感できる子どもの育成
～学び合いを活かした活動を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 児童の学びの姿勢から

昨年度、「分からないことを聴き合い、やりぬく子」を研修テーマに、一人一授業研究を通して、実践を積み上げてきた。このテーマは、平成 25 年度の研究のまとめによると、「話し合い活動の中で、子どもたち同士のかかわり合いが増えてきたが、課題に対して一人一人が自分の考えを友だちに伝えていたか」というと全員ではなく一部の子であった」「分かる子が分からない子に教える場面が少なかった」「学習意欲の低い子は、始めから分からないとあきらめてしまう子もいた」という課題を受けて設定されたものであった。

そこで、授業研究では、これらの反省を踏まえ、「分からないことを聴き合うことで、課題に対してやりぬく姿」をめざして実践を積み上げてきた。その過程の中で、どの実践も課題に対して真剣に取り組む、子どもたち同士のかかわりや、授業者の支援を通して、解決しようとする姿が見られた。また、ペアまたは小集団での話し合い活動、全体での検討場面で自分の考えを表出したり、再思考したりする場面も見られてきた。

(2) 昨年度の研究成果と課題から

昨年度の校内研究では、次のような成果と課題が明確になった。

【成果】

- ・本時のねらいや実態に合った課題提示は、その後の学習意欲を喚起し、個々の解決の原動力になる。



授業の始めの段階で子ども達に与える課題の提示の工夫により、「えっ?」「どうして?」「やってみよう」という学習意欲に繋がる。

(例) 視覚的教示、既習事項と未習事項のギャップ、身近な生活場面からの課題など

・小集団での考えの交流は、全体検討（交流）の前段階として有効である。



表現力が十分ではない当校の児童の実態から、小集団での話し合い活動を取り入れることで、少人数であるからこそできる話しやすさ、聴きやすさが考えの交流につながっていた。

【課題】

・学び合いの成立には、個々の伝える力が必要である。



授業研究の様子から、子どもの「伝える力」が十分に育っていないという実態が見られる。これは、25年度の研究の反省点でも挙げられている。すぐに身に付くものではないこの力は、日々の授業のなかで随時育てていく必要がある。

・「学び合い」には、明確な視点が必要であり、それを子どもが把握してこそ有効な活動になる。



「何を話し合うのか」「何を使うのか」「話し合った後どうするのか」など、明確な視点を与えた実践が少なかった。学び合いが成立するためには、教師がどのような視点を与えるかがとても重要になってくる。

上記の(1)(2)から、課題に対して前向きに取り組む児童が増えてきているという成果が見られる反面、子ども達どうしのかかわり方・話し合い・教え合いの姿から、一方的なかかわりや、不十分な話し合いになってしまう感がある。また、子ども同士のかかわりにおいて、その目的(話し合うための視点)が明確でないがために、「何が分かったのか」「友達から何を得たのか」という点が曖昧であった。

そこで、「分からないことを聴き合い」という狭い窓口ではなく、「学び合い」を通して子ども達が「分かった」「できた」と実感できる授業構想を展開する必要があると考えた。

3. 学習指導改善調査の結果から

当校では、本調査の結果を学級単位で分析した。主に、「各教科の正答率の県比較」「県比較で10ポイント以上上回った問題、下回った問題の洗い出し」「今後の授業改善に向けての取組の明確化」を行い、冊子にして全職員に配布し、校内研修と合わせて全校体制による取組にすることを共通理解した。

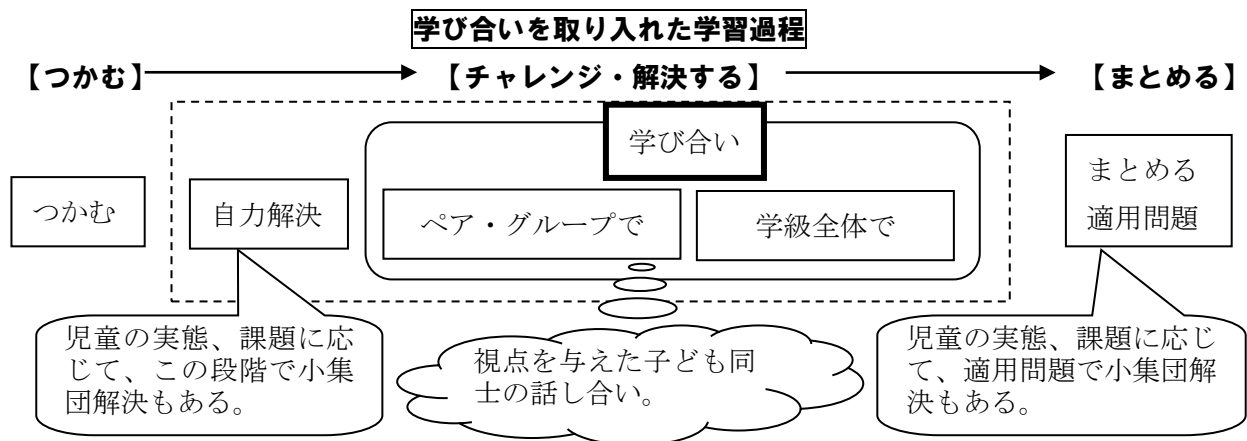
ここでは、研究教科の算数における各学年・学級の授業改善に向けての取組を簡単に記す。

学年・組	授業改善に向けての今後の取組
4年1組	10%以上上回った問題はないが、普段から個人差が大きいので、少人数指導や個別指導などで底上げを図る。合わせて、かかわり合って学ぶ学習形態を重視した授業を積み上げる。

5年1組	<ul style="list-style-type: none"> ・式の意味を理解させ、書く活動をたくさんして、説明する力を育成する。 ・図形の性質を関連付けて、作図ができるようにする。キーワードに慣れさせ、説明する力を育成する。
5年2組	<ul style="list-style-type: none"> ・数と計算、図形領域に限らず、解決方法を説明する。(話す・書く)活動を重視する。 ・自分の考えをもとに意見を述べたり、分かったことをまとめたりする経験を重視する。
6年1組	<ul style="list-style-type: none"> ・図形問題に対して、単に立式・答えを求めるだけでなく、その式のもつ意味(式が図形のどの部分に当たるものなのか)をしっかりと理解させていく。 ・授業全般に関しては、自分の考えをノートに書かせる活動を大切にしていく。

4. 研究主題と学習指導改善調査の結果からの授業の方向性

(1) 研究主題の具体化



<分かった><できた>と実感できる とは・・・

・学び合い活動により、

- ① 初めは分からなかったり、見通しをもてなかったりした児童が「そうか」「そういうことか」と解決の糸口に気付く。
- ② 自力で解決できた子は、自分の考えを見直したり、再構築したりすることができる。
- ③ 最終的に、適用問題を自力解決できる。

など、学習を進めていく中で、「分からない」「難しそう」という意識が、「できそう」「できた」というプラスの方向に児童が変容すること。

<学び合いを活かした活動> とは・・・

・視点を明確にした、ペア、少人数(班など)、全体でのかかわりの中で、

- | | | |
|--|---|---------------|
| <ul style="list-style-type: none"> A 「自分の考えがもてる」 B 「自分の考えを伝えられる」 C 「友達の考えを聞ける」 D 「自分の考えを、友達の考えと比べ振り返ることができる」 | } | 児童の様子が見られること。 |
|--|---|---------------|

(2) 研究仮説

めざす子ども像 : 学び合いを通して、「分かった」「できた」と実感できる子

- ① ねらいや実態に合った課題を解決する段階において、・・・(昨年度の成果から)
- ② 視点を明確にした学び合い活動を組織することができれば、・・・(昨年度の課題から)
- ③ 「分かった」「できた」と実感できる児童が育つであろう。

5. 実践の概要

【3学年の実践】

(1) 単元名 「三角形」

(2) 本時の指導 1 / 7 時間

●本時の目標

三角形を作ったり、辺の長さに着目して分類したりする活動を通して、二等辺三角形・正三角形の特徴をとらえることができる。

●めざす子ども像

- ・ 仲間集めや目的を持って三角形を作ることを通して辺の長さに着目し、三角形の特徴をとらえることができる。
- ・ 自分の考えをペアで伝え合うことによって、気軽に意見を話したり、自分の考えを確かめたりしながら主体的に学習することができる。

(3) 学び合いのポイント

第2学年では、平面図形として、三角形、四角形、正方形、長方形、直角三角形について学習している。第3学年では、二等辺三角形、正三角形などを指導し、これらに関連して角についても理解できるようにする。本時は、本単元の第1時間目であり、二等辺三角形、正三角形の定義を学習する。

目的を持った三角形づくりでは、色によって長さの違う12本のストロー（緑、青、オレンジ、赤各3本ずつ）から3本選んで任意の三角形を1つ作らせる。その後仲間集めをさせ、結果について話し合わせる中で、ストローの色すなわち辺の長さに着目させる。次に三角形の名前と定義を知らせた後で、ペアでジャンケンをさせ、勝った方が2つのうちの好きな三角形を作り、負けた方が残りの三角形をつくるというゲーム性のある活動に取り組みさせる。作った三角形を定義の言葉を使って説明し合い、学習の確認をさせ理解を深めさせる。

(4) 主な学習活動 (本時は1 / 7 時間)

つかむ	① 12本のストローから3本選んで好きな形の三角形を作る。
解決する	①教師が提示した3つの三角形のなかで、自分の作った三角形はどの仲間に入るか考え、三角形の仲間集めをする。 ②仲間集めの結果について話し合う。 ③二等辺三角形と正三角形の名前と定義を知る。 ④残っているストローで二等辺三角形または正三角形を作る。 ⑤作った三角形を定義の言葉を使って、ペアで説明をし合う。
まとめ	⑥練習問題をやる。

る

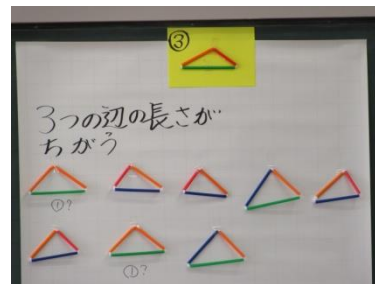
⑦今日の学習で分かったことをノートに書く。

(5) 協議の視点に立った考察

【視点①】はじめに、任意の三角形を作り、仲間集めをさせたことは、辺の長さに着目させ、それぞれの三角形の特徴を気付かせるうえで有効であったか？

初めに子ども達が4色の長さの異なるストローで作った三角形は、終始視覚的にも見えていて有効であった。それは、「正三角形」「二等辺三角形」「一般の三角形」に自己決定での分類場面で、間違っただけの判断をする児童がいたことからである。(正三角形なのに二等辺三角形の仲間に入れた等) その分類の間違った三角形のおかげで、授業者の「みなさんの仲間分けこれでいい？」の発問が生きたと考える。子ども達からは、「□の～は、▲の仲間だと思う」という声がかつた。

そこで、授業者はその一つ一つの声の一つ一つ子ども達に返すのではなく、すべて子ども達の意見を聞いてから、正三角形と二等辺三角形の定義を教えたいうえで、いくつかの意見を問うことで、全員で整理した。もし、定義をしっかりと理解させないうえで、子ども達に意見を求めても堂々巡りになってしまう恐れがあったかもしれない。自分が作った三角形が、どの仲間に所属するのかを考えることは、参加意識の点からも有効であった。



【視点②】二等辺三角形または正三角形を作った後で、ペアで説明させたことは、三角形の定義を理解するうえで有効であったか？

ペアで説明させたこと自体に有効性はあった。また、発達段階に応じた「話型の提示」も説明をスムーズにする上で良かった。定義を自分の言葉で言わせることで一人一人に定着していくことにもつながっていた。しかし、定義を黒板で示していたので、その掲示を頼りに説明していた子がいた。となると、一字一句同じでなくていいから自分の言葉で言わせてみても良かったという考えもある。



総括すると、「色の異なるストロー」→「長さの異なるストロー」→「長さが異なる辺」という視覚的に有効な教材と、その取り扱い(学習活動)が上手く繋がった実践であったと言える。「学び合い」という視点では、今回はペアや班というより、全体で検討し練り上げた形態として有効であった。

【5 学年の実践】

- (1) 単元名 「単位量あたりの大きさ」
- (2) 本時の指導 1 / 7 時間

●本時の目標

こみ具合を比べるには、たたみの枚数をそろえて人数で比べる方法と、人数をそろえてたたみ

の枚数で比べる方法があることが分かる。

●めざす子ども像

①集団解決場面

小集団グループの中で、混み具合を比べる方法を一緒に考えることを通して、自分の考えを説明したり、友達の考えを聞いて理解しようとしたりする。

②学級集団解決場面（比較検討）

自分の班の考えを友達と一緒に説明したり、他の班の考えを聞きながら理解しようとしたりする。

(3) 学び合いのポイント

①小集団解決場面

当学級の児童は、自力解決が難しい児童が多い。そこで、自力解決の時間を設定せず、最初から学習班（小集団）で話し合いながら解決方法を考えていく手立てをとる。自力解決が難しい児童も、友達から考え方を教えてもらいながら、解決方法が分かることできると考える。また、自分の考えを持つことはできる児童は、よく分からないで困っている友達に考えを説明することで自分の考えの理解がさらに深まると考える。この小集団解決場面では、複数の考えが出ると予想されるが、班で検討することにより1つに絞らせる。なお②の比較検討場面で説明できるよう、班の中で説明のしかたを練習させたい。

②学級集団解決場面（比較検討）

考えの妥当性を問う比較検討場面では、グループで考えた方法を班のメンバーで説明する。代表一人が説明するのではなく、できるだけメンバー全員で説明できるようにさせていく。

(4) 主な学習活動（本時は1／6時間）

つかむ	①課題「畳の数や人数の異なる3つの異なる部屋の混み具合を比べる」を理解する。 ②畳の数が同じで人数が異なる2つの部屋の混み具合を比べる。 ③人数が同じで畳の数が異なる2つの部屋の混み具合を比べる。
解決する	④畳の数も人数も異なる2つの部屋の混み具合を比べるにはどうすればいいか考える。 ⑤小集団解決をする。 ⑥小集団での考えを交流する。
まとめる	⑦今日の学習で分かったことをまとめる。

(5) 協議の視点に立った考察

①自力解決を経ないで、すぐに小集団での解決を行った学習過程は、混み具合を比べる方法の個々の気づきや理解のために有効であったか？

子ども達の様子から、特に低位の子ども達にとって有効であった。

○グループで話し合いながら、分からない子ども他の子どもの考えを聞きながら解決している姿

○低位の子が友達の考えを聞いて「分かった」と言っていた姿が見られたからである。「自力解決」は問題解決学習において有効

部屋わり

	A室	B室	C室
たたみの数	10まい	10まい	8まい
子どもの数	6人	5人	5人

↓

な手立てであるが、実態によってはともすると「分からない子がただ固まっている時間にしか過ぎない」ことに陥りやすいこともある。

また、3つの部屋についての表をイラストを交えて提示し、「AとB」「BとC」の比較を全体で確認し合いながら、一方が揃っている場合には、もう一方の数量を比較することで解決できることを丁寧に行った。これは、結果的には子ども達から本時で出てこなかったが「一単位量あたり」の基盤になる事項であり、確実に習得させなければならないことである。ここを丁寧に指導したことは、子どもの実態に応じた適切な方法であった。



しかし、一方で、

●できる子には自力解決させ、多様な考えを引き出したのではないか。

●実際に20分以上費やした小集団解決ならば、その一部を自力解決の時間にすればよいのでは。

という考えもある。たが、本時は「妥当性検討」の場面であったので、時間を余していたグループに、本指導案のように、始めから小集団に「他の考えも考えてごらん」の投げかけで良かったのではと考える。

また、ワークシートの配布(配布のタイミング)に課題があった。子ども達の様子から、小集団解決の前に配布したために、自然に自力解決に入っていた子が大半いた。ここでは「ワークシートの使用方法」「小集団解決後の活動の指示」「画用紙の使い方」を明確に示すべきであった。

②**班の発表に至るまでに、班の全員が関わったり説明したりしたことは、班の児童個々の理解の深まりに有効であったか？**

子ども達の様子から、わからない子にとっても班の交流により個々の深まりはあった。本時はすべての班が「最小公倍数」での求め方であったが、最小公倍数の求め方すら分からない子はその考えを想起するきっかけになっていたことや、求め方が分かっても、その説明の仕方が分からない子が友達から説明を受けたことで、その考えの意図に気付いていた子がいたからである。その班の思考のレベルでは差はあったものの、今年度の主題の「学び合い」の姿は見られた。



一方で、小集団解決の時間の途中で「どこまで考えがまとまったか」「どこで困っているか」の全体での確認があれば良かった。班での中間発表をする必要まではないと思うが、活動が停滞している班を取り上げ、他の班からアドバイスをもらう場面があったら、その後の見通しが持てた班もあったかもしれない。指導者は班個々に巡視して支援していたが、この場面でも班同士の関わりが見られたら良かった。

6. 授業研究以外の全校体制での学力向上の取組

(1) 家庭学習の啓発

①家庭学習強調週間

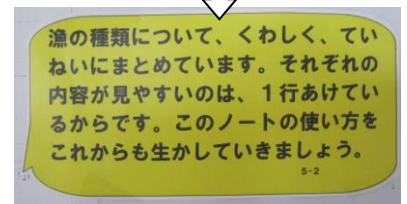
学期末(7, 12, 3月)を除く月に、全校国語テスト・算数テストを実施している。学習の進捗や毎月のweb配信集計システムの内容を考慮し問題を作成している。その際、それぞれのテ

スト前4日間を、家庭学習強調週間としてテストに向けた課題を家庭学習で取り組ませている。今年度は、現時点で全校平均95%の児童が、4日間のうち、3日以上「学年×10分以上」の家庭学習に取り組んでいる。

②家庭学習紹介コーナー

昨年度途中から、家庭学習啓発の一環として設置した。知育部が担当し、2週間に1回更新するペースで、全学級の家庭学習の取組(プリントやノートのコピー)をホワイトボードに掲示している。また、掲示された取組についての知育部職員からのコメントを一緒に掲示している。

自学を中心とした家庭学習になかなか取り組めない子の中には、「何をしたいか分からない」という子がいる。そのような子には、このコーナーにより、「見て真似る」ことからスタートできる取組が掲示されているので、とても参考になる。



③家庭学習の手引きの作成、配布

家庭への啓発(保護者への協力)のためには、「学校として取り組んでほしい家庭学習の約束や具体的な内容」について、子どもへはもちろん、保護者にも知らせる必要がある。そこで、年度初めに「自学のススメ」として家庭学習指導資料を作成し、全家庭に配布した。



(2) 表現力向上のための発表の場の設定(発表朝会)

各学年の学習の成果発表を全校の前で紹介する場を「発表朝会」として設定している。内容は、各学年に一任されているが、「人前で大きな声で堂々と発表する」力(表現力)と積極性を養うことをねらいとしている。今年度の発表朝会の各学年の内容は次のものである。



1年生 (9/30)
「音読劇 大きなかぶ」



2年生 (6/23)
「音楽劇 スイミー」



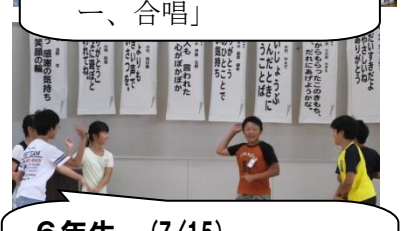
3年生 (11/25)
「詩の朗読、リコーダー、合唱」



4年生 (10/28)
「合奏 ひまわりの約束」



5年生 (6/9)
「群読 教室は間違ところだ」



6年生 (7/15)
「修学旅行の思い出をグループで寸劇&俳句で表現」

(3) 学校評価に係る学期ごとの「授業改善レポート」作成

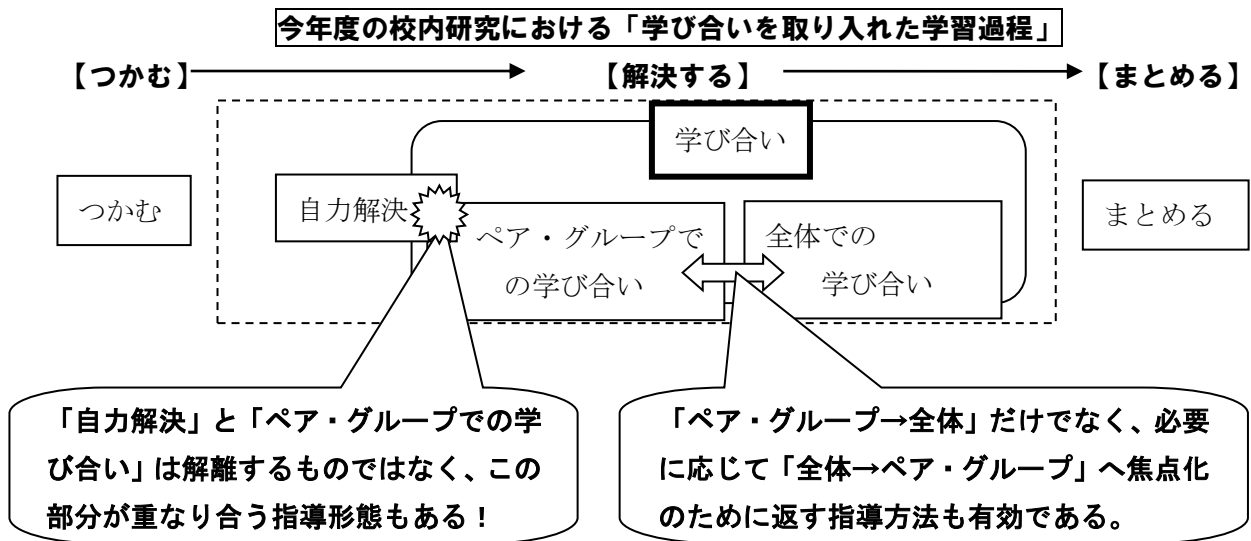
先述したように、全学級担任が主題にそった研究授業を行っている。しかし、授業改善は単発的な実践では実現できない。そこで、学校評価の知育関係の観点を【**今年度の授業改善の視点「学び合い・話し合い」に重点をおいた指導を学期2単元以上実践する**】とし、個々の実践を学期ごとにレポートに集約し、冊子にして全職員に配布している。

また、本レポートは、学級担任だけでなく級外職員も作成している。担当している学年・教科において「学び合い」に関わる実践を積み上げ、全校体制での取組により個々の実践の蓄積・日々の指導の充実を目指している。

6年1組	
(1) 学期初め学校評価について ○成果の評価項目：「自分の考えを、相手に伝えることができる子が80%以上になる」 ○教育活動の評価項目：「学び合いに焦点化した学習活動を重点に位置付けた授業を全学年で2単元以上実施する」	
教科・単元	取組① 教科 社会 単元「国づくりへの歩み」
1. 主な学習活動 ①縄文時代の絵と、弥生時代の絵を2枚見せて、「どちらが新しい時代か?」を個々に根拠を見ついで話し合う。 ②縄文時代の絵と、弥生時代の絵を整理し、全体で意見交換をする。 ③一人一人の考えや根拠について、妥当性の視点から判断していく。 ④それぞれの時代の特徴をまとめる。 ⑤本時の学習を振り返る。	
2. 見取りをすすめるための活動 話し合いについて 「話し合い」(水田・稲穂)、「川」(住居)「服装」など、イラストの中にある視点を根拠に、「～があるからこの絵の方が新しい時代である」と一人一人にノートに書かせた。全員が最低1つ以上の根拠を見つけ記述することができた。 話し合いについて 同じ視点を根拠にしても、判断が異なっている者があった。「服装」(建物)である。その際、国内で一つの結論に至らなかった。全体での議論の中で、複数の意見を聞くようにした。どの視点をとっても、「弥生時代」の方が新しいという結論に至った。 話し合いについて 考えから判断を導き出しても、全体交流で修正できたことを書いている子が多かった。 評価 全員が自分の考えをもち、解決できた。相手に伝えることができた。 (児童達成率) (35 / 35 人 → 100%)	
教科・単元	取組② 教科 国語 単元「学級討論会をしよう」
1. 主な学習活動 ①学級討論会の進め方や役割分担について理解する。 ②第1回テーマ「大人になって役立つのは、異議より同意である。」について、立場を明確にして、自分の考えを言う。→ 役割分担に合わせて、第1回学級討論会を実施する。(学級全体) ③第2回学級討論会の実施をする。(単元ごとに) 準備・・・同じ立場での話し合い、「どんな意見を出しているか?」B予想される意見に反論する。など、想定される意見を出し合い、作戦を練る。 ④第3回テーマ「核戦争にはやめやめは必要か?」で学級討論会を実施する。	
2. 見取りをすすめるための活動 話し合いについて 国語でも異議でもいい、自分はどちらの立場なのかを明確にし、その根拠を記述させた。その際、同じ立場の立場で考えを明確にし、同じ立場でも根拠が異なること、採取することに気付かせるようにした。そこから、「Bの意見を討論会で用いるか?」を相談させた。 話し合いについて 立場を明確にし、「明会、初めの主張、最後の主張、質問、オブザーバー」の役割分担をすることで、全員が考えを出せた。また、ルールを守っての討論することの楽しさを振り返りの感想で書いている子が多かった。意見を相手としている子が多く学級であるが、半単元で少しも発表することの苦手を克服することができたと考えられている。 評価 全員が自分の考えをもち、解決できた。相手に伝えることができた。 (児童達成率) (31 / 35 人 → 88.6 %) 学級討論会での考えの深まりまで求める	

7. 終わりに

年度途中であるが、全担任による授業研究は計画通りに終了した。そこから見えてきた研究主題における授業改善の成果と課題を今後明確にしていく。現段階では、これまで研究授業の講師にご指導いただいたことを踏まえると、研究の方向性は決してずれていたり、矛盾したりしてはいない。しかし、「学び合いの学習過程」においては多少改善していく必要がある。それは、次の点である。(吹き出しの部分)



これまで取り組んできたことを大切な実践と捉え、今後も「分かった」「できた」と目を輝かせて学ぶ子どもの姿を実現するために、日々の授業を大切にしていく。

また、授業だけでなく当校の児童の実態に応じた、「家庭学習の習慣化」「表現力の育成」といった教育活動も充実させるために、評価・改善を加え、真の学力を身に付けさせていくために、全校体制で取り組んでいく。